校長室だより～燦燦～ №２９６

思い出の万年筆

2021.2.17

中学生のときに「将来何になりたいのか？」と聞かれたら、たぶん答えられなかっただろう。いや、その場をしのぐために「学校の先生」とか「新聞記者」などと適当なことを言っただろう。事実、卒業文集の“ぼくの夢”の欄には「新聞記者」と書いてあった。その場かぎりの夢である。将来のことを考える力がなかったのである。それだけの情報もなかった。

では、どうやって志望校を決めたのか。昔は高校受験に関する情報や学習の仕方を“受験雑誌”なるものから仕入れた。学校の先生は、情報はある程度与えてくれたが、学習の仕方については、ごく一般的なことを教えてくれただけで、「その人に合った」方法などということは全然指導されなかったと記憶している。

今の中学生はどうか。相変わらず学校の先生は、「がんばれ」とか「もっと勉強したほうがいい」というセリフは得意である。しかし、勉強のやり方はあまり教えてくれないのではないか。したがって、勉強をやる気はあるのだが、何をやったらいいのかわからない人が多いのではなかろうか。やりたくてもやり方がわからないというのは、つらいことである。

なぜ、勉強のやり方を教えてくれないのか。自分も先生という立場になってみると、〇〇君に特別に勉強のやり方を教えたというのは、あまりないように思う。国語の担当として、国語の勉強の仕方については、３パターンくらい提示して、そこから選んだり、新たに自分に合った方法を考えることができるようにしていた。勉強のやり方を教えたケースは、自分のほうから自主的に私に聞きにきたというパターンが多い。ということは、聞かれなければ教えないのである。なぜだろう、不思議である。

先生に聞けない人はどうするのか。昔は受験雑誌があった。今はどうだろうか。たぶん受験雑誌を買っている人は少ないだろう。受験雑誌とは「中２コース」（学習研究社）と「中２時代」（旺文社）の二つである。どちらかが先になくなってしまった。それはなぜか。売れなくなってしまったのである。その原因は、塾や通信添削などである。雑誌から得る情報を塾や通信添削から得ることができるようになったのである。

果たして、塾でどれだけの情報を与えてくれるだろう。「〇〇ゼミ」などの通信添削をどのくらいの人が続けているだろう。昔は「コース」でも「時代」でも年間購読の予約をすると、万年筆などの“物”をもらえた。その万年筆が欲しくて３月末になると、喜んで本屋さんに行ったものである。「コース」も「時代」も内容にそれほどの差はない。アイドル歌手のことや定期テスト対策、教科書ガイドに受験情報などなど、値段のわりに充実した内容だった。別冊の付録も魅力の一つだった。

「昔はよかった」などと懐かしがっているのではない。問題なのはあまりにも情報がいろいろなところから出てきている。にもかかわらず、生徒の皆さんのところには意外と入ってこない、ということである。便利になった分、むずかしい世の中になってしまったような気がする。

ところで、私はその受験雑誌のおかげで全国のいろいろな高校の情報を仕入れることができた。東大合格者ベスト３。開成高校（東京）、灘高校（兵庫）、鹿児島ラ・サール高校（鹿児島）の３校である。今は少し変わってきたが、やはりこの３校は有名である。ちなみに「ラ・サール石井」という芸能人を知っているだろうか。そう鹿児島ラ・サール高校の出身である。

実は中学３年生のときに、家を出たくて県外の高校について調べたことがある。当然「中３コース」を使った。自分の学力や高校のある都市、気候などから総合的に判断して選んだ高校が「函館ラ・サール高校」である。今考えると単なるあこがれにすぎなかったようである。結局、親にも先生にも函館の「は」も口にしなかった。そのときは、けっこう真剣に考えていたのだが・・・。いまだに両親はこのことを知らない。いまさら恥ずかしくて言えない。